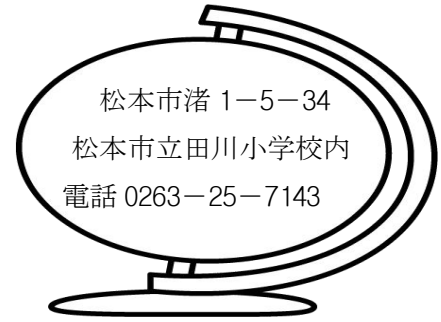


松本市子ども日本語支援センター便り

平成 25 年 4 月

No.10



松本市渚 1-5-34
松本市立田川小学校内
電話 0263-25-7143

例年になく桜をはじめ花の開花がとても早く、街中が春の香り、彩りであふれています。

希望あふれる4月。元気に咲く花々のように、今年も多くの子供たちが元気に入學しました。そうした中、日本語を母語としない子どもたちは希望に加え不安も抱えての新生活がスタート。子ども日本語支援センターでは、そんな子供たちが一日でも早く学校に適應し、友達と一緒に授業が受けられるよう、本年度も精いっぱい子どもたちをサポートしていきたいと思っています。

平成24年度 子ども日本語支援センターのあゆみ

～ 支援を通してわかったこと、感じたこと～

センターでは昨年度、市内 15 の小中学校で 7 か国(※)39 人の子供たちを支援しました。日本語が全く話せない子どもたちだけでなく、日本語でのおしゃべりはできるけれど原級での授業理解が難しい子どもたち、日本語も母語も年齢相当に育っていない「ダブルリミテッド」の子どもたちなど、支援児童生徒のタイプは多岐に渡っています。

支援の形態は、原級授業からの「取り出し授業」。言語発達段階にあった手法と教材を用いて指導しています。これまではマンツーマン指導がメインでしたが、昨年度は支援人数の増加もあり、初めて「グループ指導」も試みました。グループの良さ、難しさなど、今後の支援活動に参考になる様々な示唆を与えられました。

多くの子どもたちを支援する中で、特に「体系だった日本語指導」の大切さを実感しています。日本語が全く分からないゼロスタートの子どもだけでなく、耳から入った日本語だけでなんとなく生活できてしまっている子どもたちにも、“日本語を順序立てて整理して教える”、そうすることで、読み書きの力もぐんとつき、その力が必然的に“学力”へと結びついていくことがわかりました。当然のことながら、子どもたちの家庭環境、母国での教育歴、来日年齢・時期、そして原級での先生やお友達との関わりも日本語習得に大きな影響を与えていることは言うまでもありません。

これから日本で教育を受け、社会に羽ばたいていく子どもたち。生活日本語だけでなく、さらに学校の勉強が分かる日本語力をつけてあげることが不可欠です。日本語が少しわかるようになった子どもたちの多くは、友達と同じことをしたい、つまりクラスの授業がわかりたい気持ちが

とても強くなります。「言葉がわかる→もっと知りたい気持ちになる→言葉でものを考えられる、つまり思考力がつく→心が成長する」。子どもの成長には、言葉の力がいかに大切か、言葉なくして全人教育はできないのではないか…。日本語を学ぶ子どもたちを前にして、私達は日々そんなことを実感しています。



※7か国の内訳…ブラジル、中国、フィリピン、タイ、スリランカ、韓国、ネパール



支援の現場から

～「僕の頭は“まだら模様”。」～ある中学生の苦しみ～

「線分の両端からの距離が等しい線分上の点を、その線分の中点といいます。」

(中1 数学「平面図形」の説明より)

ある中学生は、この文のたった一語わからなかったために、テストで点を落としてしまいました。彼は「線分」「中点」「等しい」など数学特有の学習用語は知っていたのに、日本人生徒なら当たり前前に知っていて読める「両端」がわからなかったのです。そして彼は、自身の勉強の理解度を図に描いて「ぼくの頭の中は、こんな風だ」と説明しました。(右図参照)。

日本語の文章 ↓ わからない言葉

……(?)……(?)……。

「……。」……(?)……

……(?)…。

……………(?)…。

文中のおおよその言葉は知っている、もしくは聞いたことがあるが、その中にぽつぽつと知らない言葉がある。つまり、“まだら模様”のようだというのです。

「教科書の文章を読んで何となくはわかるけれど、知らない言葉が出てくると、そこで躓き、勉強が進まない」「本人は勉強しているつもりなのに、それがテストの点に反映されない」。中学生になってその現実の厚い壁に苦しんでいる子どもたちの実体が見えてきました。

彼らは、日常会話にはほとんど問題なく、小学生まではあまり不自由なく学校生活を送っていたのですが、実はその日本語力が勉強を理解するまでには至っていなかったのです。つまり「生活言語力」と「学習言語力」の根本的な違いが見過ごされてしまったわけです。「生活言語力」は、一般的には来日後1年ほどで習得できるといわれていますが、教科学習に必要な読み書き能力、つまり「学習言語力」の習得には5～7年はかかるといわれています。小学校までは特に問題がなかったのに、中学校に上がったとたんに子どもたちが突き当たるこの現実の壁は非常に高く、乗り越えるのは容易ではありません。

↓

日本語を母語としない中学生支援の課題

上記の例など、中学生の支援は課題が山積、私達も日々頭を抱えています。

言語習得の臨界期を過ぎて来日した中学生の場合、母国での教育環境で習得度合に差が出ます。勉強することの意義を理解し、母語での思考力がついて

いる場合は生活日本語は比較的容易に習得できますが、その逆の環境で育ってきた生徒は、生活日本語もままならず苦労します。

生活日本語をクリアしても、中学生の場合、必然的に「高校入試」が次の目標となります。ところが、学習言語力を十分につけるだけの時間がありません。また、スライド式で時間割が動いているため、取り出しでの支援も容易ではありません。さらに、思春期ならではの精神的な難しさも。「日本語力が十分でない」「時間がない」「十分な支援ができない」など“ないない尽くし”……。

その困難さを「本人の能力」といって片付けてしまわず、私達支援する側も、寄り添い一緒に考えていきたいと思えます。

